

はじめに

人間らしい生活の基本を「衣食住」から捉えて振る舞うことに、我々はなじんでいる。そもそも、生活（あるいは暮らし）とは、「社会の中で活動し、生きながらえること」を意味する。その生活に住を付して「住生活」という場合、それは、住居で営まれる生活、住むことに関すること、を指す表現である。そして「住居、住まい、住み処、住宅」というように、住んでいること、その場所、家、をあらわす言葉は数多くあり、我々がその使い分けをしているのは、住生活というものが多様多彩な繋がりによるものであること、移ろうものであることによる。

物理学者であり随筆家でもある寺田寅彦は『日本人の自然観』（東洋思潮、1935年）において、日本の自然を「…慈母であると同時に厳父である」と評し、そのような環境に応じて日本人がいかなる生活様式をとって来たのか、日常生活、精神生活の事象を洞察し論じている。そして、結語で以下のように述べている。

私は、日本のあらゆる特異性を認識してそれを活かして、周囲の環境に適應させることが日本人の使命であり存在理由であり又世界人類の健全な進歩への寄與であらうと思ふものである。世界から櫻の花が消えてしまえば世界は矢張それだけ淋しくなるのである。

庶民の文化が花開いた江戸時代から、明治、大正、昭和、平成、そして令和の現代へ。社会の様相は移ろい、人々の生活の質は向上し、我が国での個々人の人生は長くなった。日本が地球規模で環境問題に取組み、国際社会の一員として世界に貢献することが当たり前の時代である。寺田が観察した日本人の日常生活はノスタルジックなものとなったが、日本の自然は、敬うべき慈母であり厳父のままである。環境に適應し未来に相応しい住生活を実現するためには、住み手と作り手の双方に自分らしく学び生きることが求められる。

本書は、「住居」を通して「生活」を学び「デザインする」ための教科書である。住居について、これから学びはじめの者にとっては、基礎を築く足がかりとして、より深く学ぼうとする者にとっては、行く先を灯す道しるべとして、そして、豊かな生活を求めるすべての者にとっては、住まいのこれまでを振り返り、これからを考える力の養分として、役立つ本となることを目指し、ぜひ理解して欲しい内容を包括的にわかりやすく著すことを心掛けた。二部構成の本書は、第一部では住居学、第二部で計画学を扱っている。それぞれに設けたトピックスを通して、住生活を科学的に捉えて、住居をデザインするための方法・手法を解説している。第二部の最終章（15章）では、住まいの実例として特徴ある住宅作品を取り上げ、建築家の寄稿により紹介している。また、カラー刷りの写真、図表を全編に渡って掲載し、空間のイメージしやすさ、内容の分かりやすさを高めるようにした。執筆者には住居学および建築計画学の研究者が集まり、年齢・経歴の上下なく意見を交わして、それぞれが得意とし関心を寄せるトピックスを執筆して頂いた。以上の結果、住宅設計およびインテリアデザインの初学者にとって特に有益な参考書となっている。

本書は先達による数多くの成果の上に成り立っている。引用・参考とさせて頂いた文献などの関係者各位に謝意を表す。また、志賀信義氏ならびに今枝宏光氏ほか理工図書株式会社の方々のご尽力により出版へ至った。改めて深く感謝申し上げる。

2021年6月

執筆者を代表して 夏目欣昇

第1章

住居の成り立ち

本章では、先史時代から現代までの住居の変遷について、日本と欧米の事例を見比べながら概説していく。紹介している事例の多くは、個人や家族が生活する最も基本的な居住形態である「一戸建て住宅」から選んでいる。単体の住居として建てられた一戸建て住宅は「独立住宅」や「個人住宅」とも呼ばれ、住居の複合体である「集合住宅」とは区別されている。

1.1 住居とは

人間にとって住居とは、厳しい天候や危険な外敵から身を守るための場であると同時に、個人や家族を取り巻く社会の中で生活を営んでいくための場である。人間のための生活の場を示す言葉として、主に、住居・住宅・住まいといった用語が使われている。その中でも、「住居」と「住宅」の使い分けは重要であり、住居が「住まうこと。また、その家や場所」（大辞林第三版、小学館）、住宅が「人の住む家」と定義されているように、



図 1.1 先史時代の住居 - 1

建物そのものを示す「住宅」に対して、住むという行為を伴う「住居」は生活の場を意味している。英語でも "home" と "house" は意味合いが異なり、home が「(家庭生活が営まれる場所としての) 家、家庭」、house が「(建物としての) 家、家屋」(プログレッシブ英和辞典、小学館) と定義され、home は生活の営む人間のつながりを含んでいる。それぞれ "home" は「住居」、"house" は「住宅」に置き換えられ、スイートホーム (sweet home) が「愛情あふれる家庭」(大辞林第三版、小学館) と表現されるように、住居は物理的な機能のみならず、住み手に対する心理的な影響が関わっている。

1.2 住居の変遷

住居にとって、人間の生命に関わる安全性を確保することが最も重要であり、その起源は風雨や積雪などの天候、猛獣や害虫などの外敵から身を守ることが始まりとなっている。風雨を遮ったり火を起こしたりするため、壁や天井のように囲われている空間が必要であり、自然浸食で形づくられた洞窟(洞穴)や岩陰を生活の場として用いていた。人骨や動物遺体と共に生活の痕跡を残した先史時代(旧石器時代)の洞窟遺跡や岩陰遺跡は世界各地で発掘されており、狩猟採集の生活に加えて埋葬や呪術に使われた遺物や遺構も出土している。

ヨーロッパでは出土例が多く、フランスの「ヴェゼール溪谷の先史的景



図 1.2 先史時代の住居- 2

観と装飾洞窟群」(ユネスコの世界文化遺産) *1 には、ラスコー洞窟(図 1.1) やフォン・ド・ゴーム洞窟を含めて 25 ヶ所の洞窟遺跡が広がっている。ラスコー洞窟では、石器や骨角器と共に、クロマニヨン人の頭骨が発掘されている。洞窟壁画にはその地域で生息していたパイソンや黒牛などの動物の彩色画が描かれ、吹き付けた顔料で刻印された人間の手形も残っている。

日本での出土例は少ないが、長崎県佐世保市の**福井洞窟**(図 1.1、国の史跡) や**泉福寺洞窟**(国の史跡) では、河川沿いや湧泉近くの洞穴につくられた住居跡が発掘されている。15 枚の地層に沿って、旧石器時代の石器から縄文時代の土器が出土しており、第 12 層では細石器と共に炉址が見つかっている。富山県氷見市の**大境洞窟住居跡**(図 1.1、国の史跡) は、縄文時代中期から近世までの洞窟遺跡であり、6 枚の地層から、顔面装飾や抜歯が施された人骨、大型の石棒や石包丁が出土している。

1.3 先史時代(中・新石器時代)の住居

氷河期が終わった中石器時代には、狩猟採集の生活に植物栽培や漁労が加わり、生活の場は耕作や掘削に適した平地部に移動している。平らに掘った地面に柱を建て、桁と梁を渡して垂木を架け、草葺き屋根を地面まで架け降ろす**竪穴式住居**が使われ始めた。海岸や湖岸に近い住居跡には貝殻が残されており、食料の残滓である貝殻や魚骨のほか、破損した土器や石器、



図 1.3 古代の住居 - 1

炉で使われた焼土や灰が発掘されている。

氷河の後退により森林地帯が発達した新石器時代には、穀物栽培と家畜飼育を伴う農耕牧畜の生活が始まり、沿岸低地や丘陵地に集落が形成されている。集団で定住するため大量の食料を蓄える必要があり、猛獣のみならず他部族の人間が外敵となり農作物や家畜を守る必要があった。柱や杭で床を持ち上げ、害獣や害虫の侵入を防ぎ、湿気や洪水から貯蔵品を守る**高床式住居・倉庫**が造られていた。地面の床と屋根で構成されていた竪穴式住居や柱で床を持ち上げた高床式住居から、柱と壁で屋根を支えて壁に開口部を設けた**掘立柱式平地住居**が発展したことによって、伝統的な木造住宅の原形が成立している。

ヨーロッパでは中石器時代から竪穴式住居が使われ始め、新石器時代の住居址がフランスの**カンピニー遺跡***2で発掘されている。高床式住居・倉庫は新石器時代から始まり、森林資源に恵まれたアルプス山脈周辺のポーデン湖やリュブリャナ湿原などの湖川や沼池では、高床式住居の一種である**杭上住居**が発見されている。1853年の大干ばつによって水没していた集落遺跡が現れた「**アルプス山脈周辺の先史時代の杭上住居群**」(図1.2、ユネスコの世界文化遺産)*3は、スイス・イタリア・ドイツ・フランス・オーストリア・スロベニアの6ヶ国111ヶ所に広がっている。水中に丸太杭を建てて横木を渡し、床板と土を敷き詰めて柱と壁を立ち上げ、藁葺き屋根を架けた高床式住居がつくられていた。陸から隔離された水上生活は、漁労を行うと同時に、外敵の襲撃から身を守るために適していた。

*2 (仏) Campigny

*3 (英) Prehistoric pile dwellings around the Alps



◀ ファウヌスの家
イタリア
カンパニア州
ナポリ県ポンペイ
紀元前2世紀頃

▶ ヴェッティの家
イタリア
カンパニア州
ナポリ県ポンペイ
62年



世界の住居

ドムス

ドムス

古代

平安時代

寝殿造

鎌倉時代

日本の住居



◀ 法住寺殿
復原模型
京都府京都市
988-1032年

▶ 法住寺殿
復原平面図

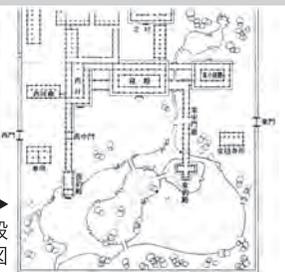


図 1.4 古代の住居－2

湖・河畔では小麦や大麦の栽培、牛や豚の牧畜が営まれ、平地住居跡と共に丸木舟や荷車の部材が出土している。スペインのガリシア州やアストゥリアス州で残されている高床式倉庫は、トウモロコシなどの農作物の貯蔵に使われ、木造以外に石造や煉瓦造でつくられている。

日本の中石器時代は縄文時代以降となるが、農耕牧畜の生活が主流となったのは弥生時代であり、水稻農耕を中心とした**農耕集落**や**環濠集落**は九州から東北にかけて広がっている。長野県茅野市の**尖石・与助尾根遺跡**（国の特別史跡）は縄文時代の集落遺跡であり、尖石では33ヶ所、与助尾根では28ヶ所の竪穴式住居が発掘されている。狩猟採集に使われた石斧や石鏃^{せきさく}、住居址から石囲炉が出土している。静岡県静岡市の登呂遺跡（図1.2、国の特別史跡）は弥生時代の農耕集落であり、竪穴式住居や高床式倉庫と共に水田や井戸が発掘されている。狩猟・漁労具の石器、壺・甕^{かめ}の土器、木製農耕具・機織具や青銅製装身具が出土している。佐賀県吉野ヶ里町の**吉野ヶ里遺跡**（国の特別史跡）は弥生時代の環濠集落であり、外敵の侵入を防ぐため二重の環濠・木柵・土塁で囲われ、見張り用の物見やぐらが設けられた。大きな外壕の中に2つの内壕があり、竪穴式住居や高床式住居・倉庫と共に、祭祀が行われる主祭殿・東祭殿・斎堂が内壕の中に配置されていた。石器・土器・青銅器・鉄器・木器のほか、勾玉・銅鏡・織物などの装飾品や祭具が出土している。



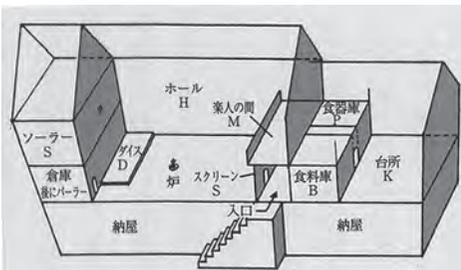
図 1.5 中世の住居 - 1

1.4 古代の住居

人間の移動に伴い異民族との闘争や交易が盛んになり、集団で生活する部族から共同体として組織された領国が生まれ、神殿を中心とした古代都市が形成されるようになる。共同体の中には貴族や平民といった階級意識が生まれる一方で、闘争に敗れた異民族が奴隷となり、都市建設の労働力として投入され、城塞や宮殿など大規模な建造物が構築されていった。先史時代は同じ部族で営まれる住生活は類似していたが、原始的共同体から古代的階級社会に移行していく中で、住居の形態は身分や生業によって変化している。

ヨーロッパの地中海沿岸では先史時代から石造や煉瓦造の住居がつけられ、古代ローマの典型的な上・中流階級の住宅様式として**ドムス**が用いられていた。「**ポンペイ、ヘルクラネウム及びトッレ・アンヌンツィアータの遺跡地域**」(図 1.3、ユネスコの世界文化遺産)*4では、ヴェスヴィオ山の噴火によって埋設された古代ローマの都市遺跡が残されており、中庭型住宅のドムス(パンサの家、図 1.3)(ヴェッティの家、図 1.4)が発掘されている。街路に面した店舗や貸室に対して内側に設けられた住居では、天窓や吹き抜けがある**アトリウム**(広間)、列柱廊を介した**ペリステリウム**(中庭)を囲んで居室が配置され、光や風を取り入れた開放的な外部空間を確保していた。街路に近いアトリウムの周りには応接室・待合室・執務室など接客用の居室、奥に入ったペリステリウムの周りには寝室・

*4 (英) Archaeological Areas of Pompei, Herculaneum and Tore Annunziante



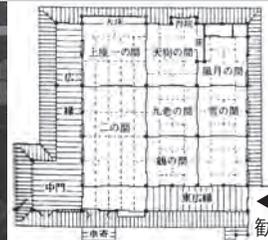
マナハウス
基本型
13世紀

バックウッド・ハウス
イギリス
ウォリック州
16世紀



| | |
|-------|-------|
| 世界の住居 | マナハウス |
| 中世 | |
| 日本の住居 | 書院造 |
| 桃山時代 | |

勸学院客殿
滋賀県大津市
1600年



勸学院客殿
平面図

図 1.6 中世の住居- 2

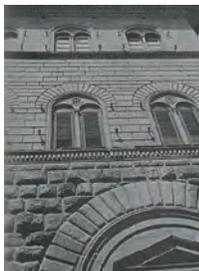
食堂・台所など私的な居室が設けられ、その背後に噴水や花壇がある庭園が造られていた。

日本では、渡来人によって大陸文化が伝播した飛鳥・奈良時代から平安時代にかけて、条坊制を敷いた計画的な都城が形成された。大規模な都城は奈良県の藤原京から始まり、「平城京跡：古都奈良の文化財」(図 1.3、国の特別史跡、ユネスコの世界文化遺産)を経て、京都府の平安京へと遷都していった。都城の中には天皇の内裏や貴族の邸宅が設けられ、典型的な上流階級の住宅様式として寝殿造が用いられた。京都府京都市東山区の法住寺殿跡(図 1.4)では、寝殿造の遺構として門・塀・溝・土坑などが出土している。東西に門扉が設けられた塀で囲われ、庭園や池を向かって木造の寝殿・対屋・中門廊・釣殿などが配されており、中心に位置する寝殿は生活の場であると同時に接客の場として使われていた。開放的な内部空間を御簾・几帳・屏風など移動可能な障屏具で仕切り、帳台・厨子棚・畳など用途に応じた調度品を用いて室礼を整えていた。

1.5 中世の住居

古代権力の弱体化によって内乱が増加していく中で、領主が家臣や領民と主従関係を結び領土を支配していく封建制度が始まり、他の領国との主権争いに備えて堅固な城塞都市が形成された。丘陵地に建てられた城塞都市は高層化された防壁と望楼で囲まれ、環濠や土塁で守られた城門で外敵

▶
パツァツォ・メディチ
イタリア
トスカーナ州
フィレンツェ県
1444-1459年



◀ パツァツォ・メディチ
断面図

世界の住居

パツァツォ

近世

日本の住居

江戸時代

書院造

書院造



◀ 名古屋城本丸御殿
愛知県名古屋市
1612-1615年

▶ 二条城二の丸御殿
京都府京都市
1624-1626年



二条城二の丸御殿
配置図

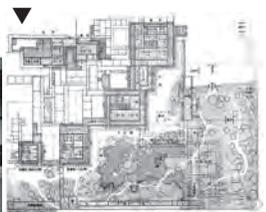


図 1.7 近世の住居 - 1

の侵入を防ぎ、戦闘性や防御性を高めて要塞化していった。天守（キープ）を冠した城は領主の住居であると同時に、戦時中は家臣や領民を收容する避難の場であり、最低限の居住性が確保されていた。城内に移り住んだ領民によってつくられた住居が町家となり、長期的な籠城に備えて井戸や耕地が設けられていた。

ローマ帝国の衰退によって戦乱の暗黒時代が長く続いたヨーロッパでは、フランスの「**歴史的城塞都市カルカソンヌ**」(図 1.5、ユネスコの世界遺産) *5 のように、領土拡大の軍事拠点として発展した中世都市が数多く残されている。主権争いによって広大な領土を獲得した封建貴族は、臣下の騎士に荘園の管理を任せており、その中心施設となる**マナハウス**(図 1.6、荘園住宅) がつくられた。軍事拠点より営農拠点としての役割が大きかったマナハウスは、領民からの租税や労役の貢納を督促する騎士の住居として使われていた。初期のマナハウスは矩形平面に切妻屋根を架けた形状であり、1階が貢納物を貯蔵する納屋、2階が接客の場であるホール(大広間)と生活の場であるソーラー(個室)で構成されていた。イギリスのウォリック州にある**パックウッドハウス**(図 1.6、ナショナル・トラストの歴史的建造物) *6 ではホールを挟んでキッチンが設けられ、楽人の間であるギャラリー(棧敷)があるホールでは、戦闘に備えて団結を強めるため君臣同席の宴が催されていた。

* 5 (英) Historic Fortified City of Carcassonne

* 6 (英) Packwood House

室町幕府の滅亡によって戦国時代を迎えた日本では、全国各地で台頭した戦国大名の住居となる城が競って建設され、**山城**(図 1.5)や**平城**(図 1.5)

▶
ロングリートハウス
イギリス
ウィルトシャー州
1567-1580年



▶ ロングリートハウス
平面図

世界の住居

カントリーハウス

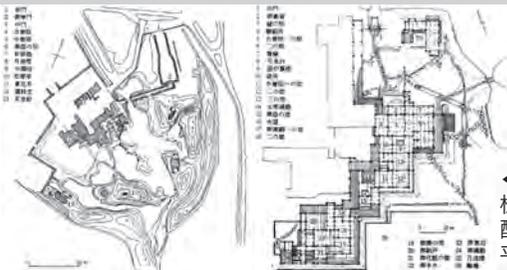
近世

江戸時代

日本の住居

数奇屋造

▶
桂離宮
京都府京都市
1620-1624年



▶ 桂離宮
配置図
平面図

図 1.8 近世の住居- 2

など地形を活かした築城技術が構築されていった。貴族の住居のみならず武士の住居にも寝殿造が取り入れられ、接客の場となる座敷で構成された書院造に発展していった。移動可能な障屏具が用いられた寝殿造とは異なり、書院造では襖が仕切られた座敷が連なり、主従関係を示す上段の間と下段の間に分けられていた。塗籠^{ぬりごめ}で囲われた座敷では、障屏具や調度品が造り付けとなり、床は板敷きから畳敷きへと変化していった。滋賀県大津市の三井寺（園城寺）にある**勸学院客殿**（図 1.6、国宝）や**光浄院客殿**（図 1.6、国宝）では桃山時代の書院造が用いられている。床の間・違い棚・付け書院が設えられた書院は、実務的な交渉や伝達を行う接見の間として使われていた。

1.6 近世の住居

主権国家の確立によって戦乱の時代が終わると、上流階級の住居では装飾性や快適性が重視されるようになった。戦闘や防御の必要性が弱まると同時に、城は権威と栄華の象徴として宮殿化され、豪奢で洗練された内部空間が設えられていく。侵入防止のため小さかった窓を大きくして採光を確保し、私的な生活の場である個室や浴室を増やすなど、居住性の向上を目指して増改築を繰り返していた。住宅にかかる余力が増していく一方で、都市の宮殿に加えて郊外に別荘をつくるなど、上流階級の住居に対する嗜好は多様化していった。人口集中によって拡大していった近世都市では、



◀ レッドハウス
イギリス
ケント州
1859年



▶ モリス商会
壁紙「るりはこべ」

世界の住居 カントリーハウス

アーツ・アンド・クラフツ

近代

日本の住居 明治時代

洋風住宅

和風住宅

▶ 旧岩崎家住宅洋館
東京都台東区
1896年



◀ 旧岩崎家住宅和館

図 1.9 近代の住居 - 1

商工業に従事する市民階級の住居が大量に必要となり、高層高密度な都市型住宅として発展していく。

宗教改革やルネサンス運動を経て封建制度から解放されたヨーロッパでは、大航海時代の到来により貿易や金融で成功した都市貴族が台頭し、封建領主から自立した商業都市には富の象徴となる邸宅がつくられた。裕福な市民階級の支援を受けて発展したルネサンス運動は、伝統的な技術の熟練に頼った職人に対して、芸術家として独創的な発想を兼ね備えた建築家という新しい職業を確立させていく。イタリアの「フィレンツェ歴史地区」(ユネスコの世界文化遺産) *7にあるパラッツォ・メディチ(図1.7) *8やパラッツォ・ルチェライ *9は都市貴族の邸宅であり、古代建築のオーダー(比例体系)やシンメトリー(左右対称)の形式美を用いた中庭型住宅は、古典様式の彫刻・文様・壁画で装飾されている。都市貴族の台頭が遅れたイギリスでは、荘園を所有する田園貴族は郊外のカントリーハウス(図1.8)を邸宅としており、中世のマナハウスを増改築しながら宮殿化していった。単純な矩形平面に別棟が設けられ、二の字型・コの字型・ロの字型に拡大しながら中庭型住宅へと変化していった。団結を重視した君臣一体の生活は失われ、動線を含めて主人と使用人の空間が分離する一方で、洗練された装飾が施されたホール(大広間)・パーラー(応接室)・サロン(談話室)など、来客をもてなす社交の場が重視されていた。

江戸幕府によって平定された日本では、生活が安定した武士の住居を中心に、格式を重んじながらも贅を尽くした書院造が完成していった。京都

- * 7 (英) Historic Center of Florence
- * 8 (英) Palazzo Medici
- * 9 (英) Palazzo Rucellai



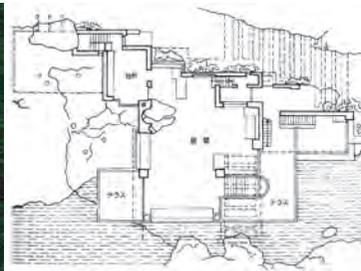
図 1.10 近代の住居 - 2

府京都市にある**二条城二の丸御殿**（図 1.7、国宝、ユネスコの世界文化遺産）の大広間一の間や、愛知県名古屋市にある**名古屋城本丸御殿**（図 1.7、国の特別史跡）の玄関一之間は、権威の象徴を示す座敷飾りと狩野派の障壁画（国の重要文化財）で装飾されている。格式を重んじた武士の住居（城・大名屋敷・旗本屋敷）で発展した書院造に対して、風流を好んだ天皇や貴族の別荘（離宮）では**数寄屋造**が発展していった。京都府京都市にある**桂離宮**（図 1.8、宮内庁の施設）は、数寄屋造を取り入れた書院と御殿で構成され、池泉回遊式庭園には水墨画で装飾された茶室が点在している。

1.7 近代の住居

産業革命による社会構造の変革に伴い、これまで主流だった上・中流階級の住居に対して、就労機会を求めて工業都市に集まった労働者階級の住居が大量に建設された。住居に対する社会的要求が変化していく中で、機能性や合理性の向上が重視され、新しい材料である鉄・ガラス・セメント、新しい構造である鉄骨造や鉄筋コンクリート造を用いる**モダニズム建築**として発展した。格式を重んじ贅を尽くした社交の場が中心となっていた近世の住居とは異なり、近代の住居では家族団らんの間が求められ、プライバシーの強化や家事労働の軽減が重視されていた。大航海時代から始まった植民地への文化伝播に加えて、産業革命による工業化の波は世界各地に広がり、風土や民族を超えて世界共通の**インターナショナル・スタイル**

▶
カウフマン邸
アメリカ
ペンシルベニア州
1936年



◀
カウフマン邸
平面図

世界の住居

プレイリースタイル

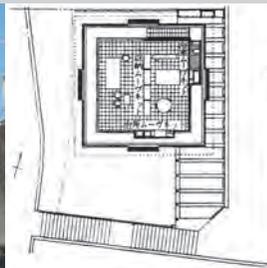
現代

昭和時代

日本の住居

メタボリズム

▶
スカイハウス
東京都
1958年



◀▶
スカイハウス
平面図・内観写真

図 1.11 現代の住居ー 1

ル（国際建築様式）を創造するという建築家の提案につながっている。

産業革命が最も進んでいたヨーロッパでは、大量生産による安価で粗悪な工業製品に対して、中世の職人に倣った手工芸製品を復活させた**アーツ・アンド・クラフツ運動**が起こった。イギリスの工芸運動を主導した**ウィリアム・モリス***10は、自らのデザイン思想を反映させたカントリーハウスとして**レッドハウス**（図 1.9、赤い家、ナショナル・トラストの歴史的建造物）*11を残しており、花鳥風月の自然美を表現した壁紙・家具・ステンドグラスなど装飾品や調度品を制作するためにモリス商会を設立している。芸術と産業の融合を目指していた工芸運動に対して、直線的な立体構成と無装飾性を重視したモダニズム建築とインターナショナル・スタイルは、世界各国の建築家によって支持されていた。**シAM**（近代建築国際会議、1928-1959年）*12に参加した**ル・コルビュジエ***13は、フランスのパリ郊外にある**サヴォア邸**（図 1.10）*14を含む「**ル・コルビュジエの建築作品：近代建築運動への顕著な貢献**」（ユネスコの世界文化遺産）*15を通して、自らが提唱した**近代建築の五原則**（ピロティ・独立骨組による水平連続窓・自由な平面・自由なファサード・屋上庭園）を実現している。**ドイツ工作連盟***16が開催した**ワイゼンホーフ住宅展覧会**（図 1.10）*17では、ヨーロッパの代表的な建築家 17 名が集まり、工業部材を用いた実験住宅を建設している。その実験住宅群の中で、ル・コルビュジエは一世帯用住宅と二世帯用住宅を設計し、近代建築の五原則を用いて規格化した量産型住宅を提案している。

* 10 （英）William Morris

* 11 （英）Red House

* 12 （英）CIAM :
Congress International Architecture Modern

* 13 （仏）Le Corbusier

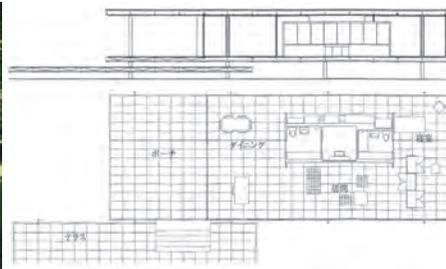
* 14 （仏）Villa Savoye

* 15 （英）The Architectural Work of Le Corbusier, an Outstanding Contribution to the Modern Movement

* 16 （独）Deutscher Werkbund

* 17 （独）Weißenhofsiedlung

▶
ファンズワース邸
アメリカ
イリノイ州
1951年



◀
ファンズワース邸
断面図

◀
ファンズワース邸
平面図

世界の住居

ユニバーサル・スペース

現代

昭和時代

日本の住居

都心型住宅

▶
塔の家
東京都
1966年



▶
塔の家
平面図

◀
塔の家
断面図

図 1.12 現代の住居－ 2

明治維新後の日本では、書院造を受け継いだ**和風住宅**に対して、西欧文化の影響を受けた異人館から発展した**洋風住宅**がつけられた。東京都台東区の旧岩崎邸庭園（国の重要文化財）には、イギリス出身の**ジョサイア・コンドル***¹⁸が設計した旧岩崎家住宅（図 1.9）として木造の**洋館**と**和館**が並び、洋館は接客の場、和館は生活の場として使われていた。中産階級の住居では和洋折衷が取り入れられ、和風住宅の玄関脇に接客の場として洋風応接室が設けられた。別荘地として開発された大阪府堺市の**浜寺住宅地**（図 1.10）では、洋風応接室付きの**中廊下型住宅**が造られ、中廊下を介して家族団らんの場である居間と、家事労働の場である水まわりに分かれていた。日本建築協会が実施した改良住宅懸賞設計では、椅子座の生活を重視した**居間中心型住宅**が提案され、中産階級のモデルハウスを展示した**住宅改造博覧会**（大阪府箕面市、1922年）が開催された。

1.8 現代の住居

二度の世界大戦によって壊滅した都市では、深刻な住宅不足に直面し、戦災復興の担い手となる労働者階級を収容するための住居が大量に求められていた。空爆によって焼け出された住民が形成した戦後スラムを解消し、安全性や保健性を確保できない劣悪な住環境にあった不良住宅地区を再開発していく必要があった。高度経済成長期には、工業化した部材を用いて住宅の大量供給が可能となり、都市の過密化に対して郊外に大規模な



図 1.13 現代の住居－3

ニュータウン (p.69 参照) が開発されていく。公共施設や商業施設が集まったセンター地区と住宅地区を混在させた都市計画に基づき、都市の複合化や家族形態の多様化に応じた様々なタイプの住居が提案されている。住居の多様化に応じて、建築家は独自の設計理念に基づき、時代背景に応じた実験的な住宅作品も残している。その住宅作品は、機能性や合理性を重視した**モダニズム**、古典様式の象徴性や装飾性を回帰させた**ポストモダニズム**、素材感や簡素化を重視した**ミニマリズム**などの影響を受けている。近年は少子高齢化による人口減少が進んでいく中で、住環境の利便性や快適性を継続させていくため、リノベーション (p.61 参照) やリフォームを施したストック (p.67 参照) 活用、自然やコミュニティに配慮した環境共生が重視されている。

第二次大戦前、ナチス政権によってドイツの芸術学校**バウハウス***19 が閉鎖され、多くの建築家がヨーロッパからアメリカに亡命した。**ネオクラシシズム** (新古典様式) が主流だったヨーロッパでは難しかった提案が、単なる模倣から脱却したアメリカで実現されており、新たな建築技術を用いて意匠と構造が融合されていた。かつてバウハウスの校長を務めていた**ミース・ファン・デル・ローエ***20 は、あらゆる機能を許容して自由に使える内部空間を用いた**ユニバーサル・スペース** (均質空間) という概念を提唱し、イリノイ州に別荘として設計された**ファンズワース邸** (図 1.12)*21 に応用している。ヨーロッパからのモダニズム建築に対して**フランク・ロイド・ライト***22 は、自然と調和する有機的な形態を用いた**プレリースタイル** (草原様式) を確立させた。ペンシルベニア州の**カウフマン邸** (図 1.11、落水荘)*23 では、周辺の森林と谷川を取り入れた居住空間を実現している。その後、プレリースタイルを発展させた**ユースニアンハウス**を考案し、中産階級向けの安価で良質な住居として、平屋建ての小規模な工業化住宅を提案した。戦前にはローコストな公共住宅やプレファブ住宅の設計に携わっていた**ルイス・カーン***24 は、建築材料の素材感を重視した意匠と構造の融合を目指した。ペンシルベニア州の**フィッシャー邸** (図 1.13)*25 では、木造の立方体を組み合わせた幾何学的な平面構成を用いて、**サブド・スペース** (サポートされる空間) と**サーバント・スペース** (サポートする空間) を分けている。

欧米化が進んだ戦後の日本では、核家族に適したモダンリビングが採用され、リビングルームと子供部屋の確保によって、居室の**パブリックスペース** (公的空間) と**プライベートスペース** (私的空間) が分離された。ダイニングキッチンによる食寝分離 (p.116 参照) や個室による就寝分離 (p.116 参照) が進められ、キッチンセット・ユニットバス・水洗トイレといった住宅設備が発展していった。合理的に規格化された**工業化住宅**や**商品化住宅**に対して、個性豊かな建築家の設計理念を反映した実験的な住居が提案されている。シーム解散後に開催された**世界デザイン会議** (東京都、1960 年)*26

* 19 (独) Bauhaus

* 20 (英) Mies van der Rohe

* 21 (英) Farnsworth House

* 22 (英) Frank Lloyd Wright

* 23 (英) Kaufman House (Fallingwater)

* 24 (英) Louis I. Kahn

* 25 (英) Fisher House

* 26 (英) World Design Conference

に参加した菊竹清訓^{きよのり}は、自邸のスカイハウス（図 1.11）にメタボリズム（新陳代謝）理論を応用し、ピロティで持ち上げた居住空間に更新可能な設備ユニットを組み合わせている。ル・コルビュジエの弟子である坂倉準三に師事した東孝光^{あずま}は、東京オリンピックの道路計画で切り取られた狭小敷地に塔の家（図 1.12）を設計し、主要道路に開いたファサードと6層に積み上げた平面を用いた用いた都市型住宅を提案している。菊竹清訓事務所の出身である伊東豊雄は、初期の住宅作品である中野本町の家やシルバーハット（図 1.13）で、空間や素材を限定したミニマリズムを表現している。

引用・参考文献

- 1.1) 日本建築学会 編：日本建築史図集 新訂第3版、彰国社、2011年
 1.2) 日本建築学会 編：西洋建築史図集 3訂第2版、彰国社、1983年
 1.3) 日本建築学会 編：近代建築史図集 新訂第1版、彰国社、1976年
 1.4) 日本建築学会 編：第3版 コンパクト建築設計資料集成、丸善、2005年
 1.5) 日本建築学会 編：第3版 コンパクト建築設計資料集成 <住居>、丸善、2006年
 1.6) 住宅史研究会 編：日本住宅史図集 12版、理工図書、2007年
 1.7) 太田静六 著：西洋建築様式史図集 13版、理工図書、1998年
 1.8) 後藤久 著：西洋住居史、彰国社、2005年
 1.9) 角田文衛 著：石と森の文化／ヨーロッパ沈黙の世界史 5、新潮社、1971年
 1.10) 江上波夫 監修：考古学ゼミナール、山川出版社、1976年
 1.11) 氷見市教育委員会：国指定史跡 大境洞窟住居跡 保全整備事業報告書、2008年
 1.12) 公益財団法人日本ユネスコ協会連盟編：世界遺産年報 2012 No.17、公益財団法人日本ユネスコ協会連盟、2012年
 1.13) 小学館編：NHK 世界遺産 100 No.12／難攻不落の城塞都市カルカソンス、小学館、2009年
 1.14) 後藤久 監修：精選住居学、実教出版、2016年
 1.15) 岸本幸臣 編：図説テキスト住居学 第二版、彰国社、1997年

写真の引用

- 図 1.1 ラスコ洞窟 写真：上記 1.9)、p.197より
 図 1.1 トロワ・フレール洞窟 配置図：上記 1.9)、p.21より
 図 1.1 福井洞窟 写真：上記 1.10)、p.94より
 図 1.1 大境洞窟住居跡 写真・配置図：上記 1.11)、巻頭写真、p.68より
 図 1.2 アルプス山脈周辺 写真・杭上住居・掘立柱式平地住居跡出土品：上記 1.12)、p.16,21より
 図 1.2 登呂遺跡 配置図・竪穴住居復原軸組図：上記 1.6)、p.4より
 図 1.3 スタビア通り 写真：上記 1.7)、p.28より
 図 1.3 バンサの家 平面図・断面図：上記 1.7)、p.28より
 図 1.3 平城京条坊 図・復元模型 写真：上記 1.7)、p.22より
 図 1.4 ヴェッティの家 写真：上記 1.7)、p.28より
 図 1.4 法住寺殿復原 模型・法住寺殿復原 平面図：上記 1.6)、p.17より
 図 1.5 カルカソンス 写真：上記 1.2)、p.49より
 図 1.5 カルカソンス城壁 写真：上記 1.7)、p.56より
 図 1.5 プファルツ城 写真：上記 1.2)、p.49より
 図 1.6 マナハウス基本型：上記 1.8)、p.106より
 図 1.6 勸学院客殿 外観写真・内観写真・平面図：上記 1.6)、p.36-37より
 図 1.7 バラツォ・メティチ 写真：上記 1.7)、p.59より
 図 1.7 バラツォ・メティチ 断面図：上記 1.2)、p.52より
 図 1.7 二条城二の丸御殿 配置図：上記 1.6)、p.43より
 図 1.8 ロングリートハウス 写真・平面図：上記 1.7)、p.68より
 図 1.10 ワイゼンホーフ住宅展覧会 写真：上記 1.3)、p.50より
 図 1.10 浜寺宅地 写真・平面図：上記 1.15)、p.27より
 図 1.11 カウフマン邸 写真：上記 1.7)、p.97より
 図 1.11 カウフマン邸 平面図：上記 1.5)、p.47より
 図 1.11 スカイハウス 写真・平面図・内観写真：上記 1.6)、p.74より
 図 1.12 ファンズワース邸 平面図・断面図：上記 1.4)、p.124より
 図 1.12 塔の家 平面図・断面図：東孝光＋節子＋利恵 著：「塔の家」白書、住まいの図書館出版局、1988年、p.18-20より
 図 1.13 フィッシャー邸 写真：上記 1.5)、p.91より
 図 1.13 フィッシャー邸 平面図：上記 1.4)、p.134より

写真撮影提供・図面作成提供（敬称略）

- 図 1.2 登呂遺跡 写真：北原玲子（カリフォルニア大学パークレー校）
 図 1.3 ボンベイ遺跡 写真：夏目欣昇（名古屋工業大学）
 図 1.3 平城京跡 写真：北原玲子（カリフォルニア大学パークレー校）
 図 1.4 ファウヌスの家 写真：夏目欣昇（名古屋工業大学）
 図 1.5 松本城・犬山城 写真：北原玲子（カリフォルニア大学パークレー校）
 図 1.6 バックウッドハウス 写真：加藤悠介（金城学院大学）
 図 1.7 名古屋城本丸御殿・二条城二の丸御殿 写真：北原玲子（カリフォルニア大学パークレー校）
 図 1.8 桂離宮 写真：濱田晋一（名古屋工業大学）
 図 1.9 レッドハウス 写真：夏目欣昇（名古屋工業大学）
 図 1.9 モリス商会壁紙 写真：北原玲子（カリフォルニア大学パークレー校）
 図 1.9 旧岩崎家住宅洋館・和館 写真：北原玲子（カリフォルニア大学パークレー校）
 図 1.10 サヴォア邸 写真：麓和善
 図 1.11 カウフマン邸 写真：夏目欣昇（名古屋工業大学）
 図 1.11 スカイハウス 写真：北原玲子（カリフォルニア大学パークレー校）
 図 1.12 ファンズワース邸 写真：夏目欣昇（名古屋工業大学）
 図 1.12 塔の家 写真：北原玲子（日本女子大学、カリフォルニア大学パークレー校）
 図 1.13 シルバーハット 写真：伊東豊雄建築設計事務所
 図 1.13 シルバーハット俯瞰パース・平面図：伊東豊雄建築設計事務所

演習課題1 「住居マップをつくろう」

年表と世界地図・日本地図を使って住居マップをつくる。

①年表：時代ごとに住居名・設計者・所在地・建設年・住宅様式・生活様式をまとめる。

②世界地図・日本地図：年表でまとめた住居の所在地を No で示し、余白を用いてその特徴を図で表現する。



| 時代 | No | 住居名 | 設計者 | 建設年 | 所在地(国・都市) | 住宅様式 | 生活様式 |
|----|----|-----|-----|-----|-----------|------|------|
| | ① | | | | | | |
| | ② | | | | | | |
| | ③ | | | | | | |
| | ④ | | | | | | |
| | ⑤ | | | | | | |
| | ⑥ | | | | | | |
| | ⑦ | | | | | | |
| | ⑧ | | | | | | |
| | ⑨ | | | | | | |
| | ⑩ | | | | | | |
| | ⑪ | | | | | | |
| | ⑫ | | | | | | |
| | ⑬ | | | | | | |
| | ⑭ | | | | | | |
| | ⑮ | | | | | | |
| | ⑯ | | | | | | |
| | ⑰ | | | | | | |
| | ⑱ | | | | | | |
| | ⑲ | | | | | | |
| | ⑳ | | | | | | |

第2章

集合住宅の変遷

「構造・設備ともに独立した一棟の建物からなる一戸の住宅」（大辞林第三版、小学館）と定義されている一戸建て住宅に対して、集合住宅は構造や設備を共有することを特徴としている。一戸建て住宅から派生した集合住宅は、水平方向や垂直方向に住居が連続した形態となっている。本章では、古代から現代までの集合住宅の変遷について、日本と欧米の事例を見比べながら概説していく。

2.1 集合住宅とは

日本ではマンションやアパートと呼ばれている集合住宅は、一般的な居住形態の一つであり、独立した一戸建て住宅とは区別されている。「1棟の建物の中に複数の住居がある形式の住宅。壁や床によって区切れ、それぞれ独立している」（デジタル大辞林、小学館）と定義されている。集合住宅と同じ意味合いで用いられる共同住宅は、「1棟に2世帯以上が共同で居住する構造の住宅」（デジタル大辞林、小学館）と定義され、建築基準法や都市計画法などの法令や統計の用語として使われている。海外では国によって使われている用語が異なり、アメリカ英語では "condominium"、イギリス英語では "flat" や "apartment" に置き換えられる。日本で用いられるマンション (mansion) は欧米では意味合いが異なり、高級な邸宅に対して用いられている。複数の個人や家族が集まり共に生活する居住形態を示しており、同じ住環境を共有する立場から、周辺地



図 2.1 古代の集合住宅

域との良好なコミュニティ形成が重視されている。

2.2 集合住宅の成り立ち

竪穴式住居や高床式住居などの複合体である集落は、日本でもヨーロッパでも先史時代（中・新石器時代）から形成されているが、複数の住居で1棟の建物を構成している集合住宅はヨーロッパの古代都市が起源となっている。古代ローマでは都市形成と人口増加に伴い、水平方向のみならず垂直方向に住居が連なった集合住宅が求められた。垂直方向に住居を積み重ねるためには、セメントや火山灰を用いたローマンコンクリートの構造物が適していた。都市の過密化に対応する住居が求められた社会情勢と、住居の高層化を可能にした建築技術が、複合的な都市型集合住宅の発展に繋がっている。日本で使われていた木造は垂直方向に弱かったが、水平方向に住居を連続させることは可能であり、江戸時代の宿場町や寺内町に建てられた長屋建住宅の町家が始まりとなっている。

2.3 古代の集合住宅

古代ローマの都市遺跡に残されているドムスでは、中庭に向けた貴族の住居に対して、街路に面した店舗や貸室が設けられていた。この貸室部分には異なる階級の平民が住んでおり、店舗部分を借りて商売を営む住民も含まれていた。古代都市への人口集中に伴って上階にも貸室が設けられ、貴族の住居と店舗や貸室が一体となった店舗付き集合住宅から**インストラ**へと発展していった。ドムスを積層させた形状のインストラは、異なる階級の住民が混住していたことを特徴としており、初期は2・3階建ての小規模なもので木造が含まれていた。イタリアのオスティアに残っている**ティアナの家**（図 2.1）*1 は、ローマンコンクリートや煉瓦が使われたインストラの遺構であり、大規模なもので一街区を用いた6・7階建ての**中庭型集合**

* 1 （伊） Casa Di Diana



図 2.2 中世の集合住宅

住宅が含まれていた。街路に面して1階に店舗、2階以上に貸室が設けられ、1階と中2階が縦割りで店舗付き貸室になっているものがあった。インストラを所有する上流階級の住居は中庭を囲んで二層に重なり、街路側の貸室に通じる階段とは分けられていた。貸室は上階になるほど条件が悪く、下層階は中流階級向け、上層階は下流階級向けにつくられていたが、いずれも台所・浴室・便所は付いていなかった。

2.4 中世の集合住宅

古代ローマ都市で建てられた大規模なインストラは、複数の所有者によって共有されていた場合が多く、その所有権は各階ごとの横割りでなく縦割りで分けられ、各室の上下階が同一所有者の区画となっていた。そうした縦割りの所有形態によって、間口の狭いインストラがつくられるようになり、中世ヨーロッパの**長屋建住宅**である**町家**（図 2.2）に繋がっている。防衛機能を有していた城塞都市の過密化に伴って、街区の敷地割りが制限され、街路に面する間口が狭くなり、奥行きが深い形状になっていった。ドイツやフランスの中世都市に残されている町家は混構造の**ハーフトィンバー様式**が用いられ、下層階は石造や煉瓦造、上層階は木造で建てられている。ロンドン大火（1666年）に見舞われたイギリスでは、建物が密集した都市の不燃化が重視され、石造や煉瓦造の町家が普及していった。スコットランドのエディンバラにあるロウンマーケットの町家は石造であり、



世界の住居

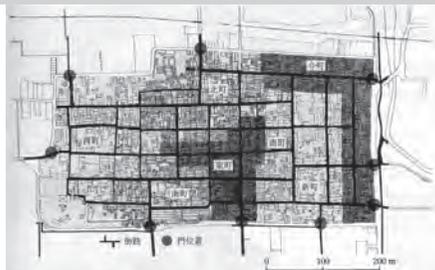
テラスハウス

日本の住居

江戸時代

寺内町

宿場町



今井町
地図（敷地割り）
奈良県橿原市
16世紀頃



五条の町家
奈良県五条市
17-18世紀

図 2.3 近世の集合住宅 - 1

グラッドストーン**の集合住宅**（図 2.2、ナショナル・トラストの歴史的建造物）*2 は、1 階が店舗、2・3 階が中流階級向けの貸家、4 階が所有者の住居、5 階と屋根裏部屋が下流階級向けの貸家として使われ、街路側の入口には**アーケード**が設けられている。異なる階級が混住しながら、複合的な用途が設けられている**都市型集合住宅**となっている。

* 2 （英）Glad-stone's Land

2.5 近世の集合住宅

古代のインストラや中世の町家は、上流階級の所有者が居住しながら、異なる階級向けの住居を供給する賃貸住宅の役割を果たしていた。都市の経済発展が進んでいたイギリスでは、郊外のカントリーハウスのように広々とした邸宅を確保するため、一街区に数十戸の住居を連続させた大規模な**テラスハウス**（図 2.3、図 2.4）が導入されていった。その一方で、経済的な成功を収めた市民階級は、投機的に開発したテラスハウスを所有し、売買を目的とした建売り分譲住宅として普及していった。四方を街路で囲まれた中庭型集合住宅のテラスハウスは、間口が狭く奥行きが深い縦割りの区画が連なり、地階から屋根裏部屋まで一住戸として使えるように独立性が重視されていた。街路から半階下がった地階には**ドライエリア**が設けられ、居住性を向上するための暖炉に必要な石炭庫を兼ねていた。中庭には御者住宅や馬屋が配され、各住戸の専用庭が設けられていた。街路に面した外壁には古典様式の装飾が施され、開放的な広場や公園が一体となっ

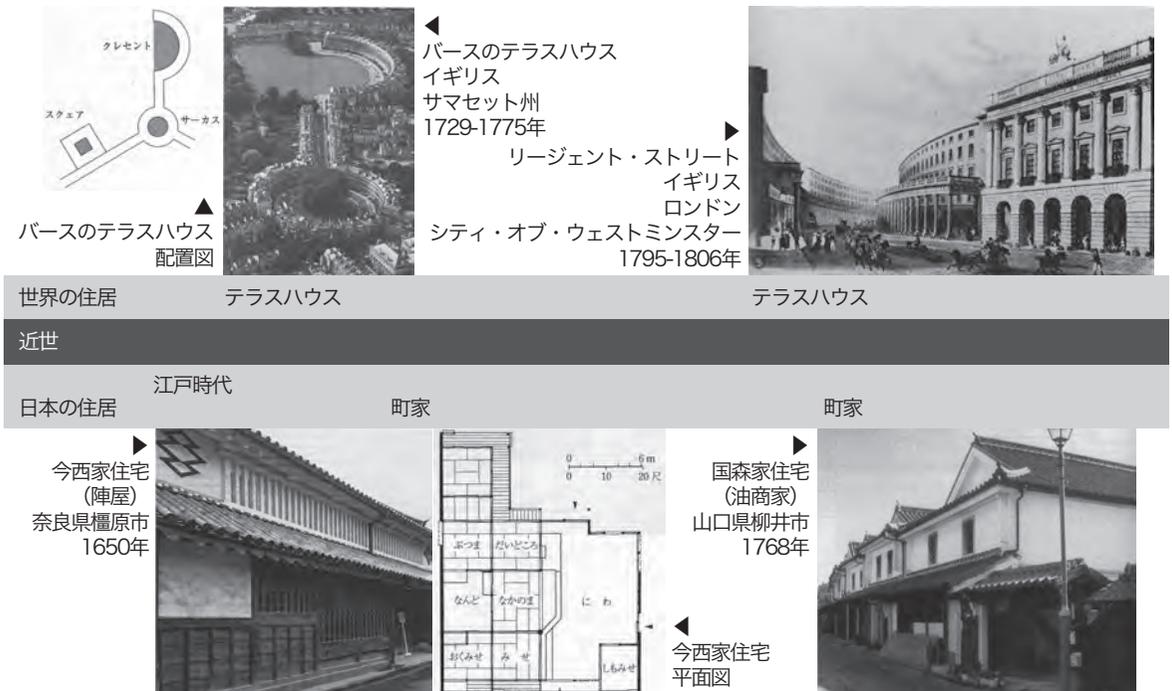


図 2.4 近世の集合住宅－ 2

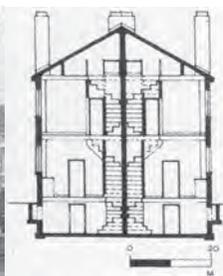
たスクエア（方形）は、洗練された街並みを形成していた。テラスハウスと広場の組み合わせは、スクエア以外にサーカス（円形）やクレセント（三日月形）が用いられた。ロンドンのベッドフォード・スクエア(図 2.3) *3 には、緑化した方形広場を囲んだ地下1階・地上5階建てのテラスハウスが建設当時のまま残されている。

ヨーロッパと同じく、都市の経済発展が進んだ江戸時代の日本では、交通の要所に発達した宿場町(図 2.3)や、自治的な寺領に形成された寺内町(図 2.3)に集まった町民の住居として、木造2階建ての長屋建住宅である町家が建てられた。日本の町家では、同じ身分や生業の住民が集住しており、ヨーロッパのように異なる階級の住民が混住する居住形態ではなかった。町家に併設された店舗や作業場が連なり街区を形成していたため、呉服町や大工町といった地名が残されている。間口が狭く奥行きが深い敷地割りにはヨーロッパと同じく、短冊状に長屋建住宅が建ち並んでいた。奈良県橿原市の今西家住宅(図 2.4、国の重要文化財)は陣屋であるが、街路に面して店舗が設けられ、作業場を兼ねた土間が通り庭となつて奥庭へと繋がっている。接客の場である店舗に続く座敷は続き間となつており、奥庭に向かうほど生活の場として独立性が確保されていた。

2.6 近代の集合住宅

産業革命が始まったイギリスでは、工業都市に集中した労働者階級の住居が大量に求められたことから、豪華で上質なテラスハウスが減少する一

▶
リーズの労働者用住宅
イギリス
ウェスト・ヨークシャー州
19世紀頃



◀▶
リーズの労働者用住宅
断面図・俯瞰写真

世界の住居

バック・トゥ・バック

近代

明治時代

日本の住居

洋式集合住宅



◀
お茶の水文化アパートメント
東京都文京区
1925年

▲
お茶の水文化アパートメント
平面図

図 2.5 近代の集合住宅- 1

方で、質より量を重視した**労働者住宅**が急激に増加していった。テラスハウスから派生した労働者用住宅（図 2.5）は、同じく縦割りの区画が用いられていたが、2戸に分割された背割り長屋の**バック・トゥ・バック**の間取りが使われ、面積および階数ともに縮小されていく。地階のドライエリアや専用庭がなくなり、狭い街路を挟んで低・中層住棟が建ち並んでいた。居住性より効率性を重視した労働者用住宅は**ワーキングクラス・フラット**として普及し、後に低所得者層向けの公営住宅へと発展している。集合住宅の大量生産を可能にした工業化の波は上・中流階級の住居にも影響を及ぼし、新しい材料や構造を取り入れた建築家によって鉄筋コンクリート造の都市型集合住宅が提案された。フランスのパリにある**フランクリン通りのアパート**（図 2.6）^{*4}は、早期からコンクリートに着目した**オーギュスト・ペレ（ペレ兄弟）**^{*5}によって設計され、革新的な建築技術と古典的な芸術表現を融合している。イギリスのロンドンにある**ハイポイント I・II**（図 2.6）^{*6}は**建築家集団テクトン**^{*7}が設計し、白塗装のコンクリート壁に大判ガラスの横長窓を用いた**モダニズム建築**の高層住棟が特徴となっている。さらに、集合住宅を中心とした複合的な住環境の目指す都市計画として、イギリスの社会改良家**エベネザー・ハワード**^{*8}による**田園都市構想**やフランスの都市計画家**トニー・ガルニエ**^{*9}による**工業都市計画面案**などが提案されたが、世界大戦が続いた時代背景から実現した計画面案は限られていた。

- * 4 (仏) Rue Franklin Apartment
- * 5 (仏) Auguste Perret , Gustave Perret , Claude Perret
- * 6 (英) Highpoint I・II
- * 7 (英) TECTON
- * 8 (英) Ebenezer Howard
- * 9 (仏) Tony Garnier

木造の長屋建住宅が中心だった日本の集合住宅は、大正時代に入ってから、欧米文化を取り入れた鉄筋コンクリート造のアパートメントへと発展

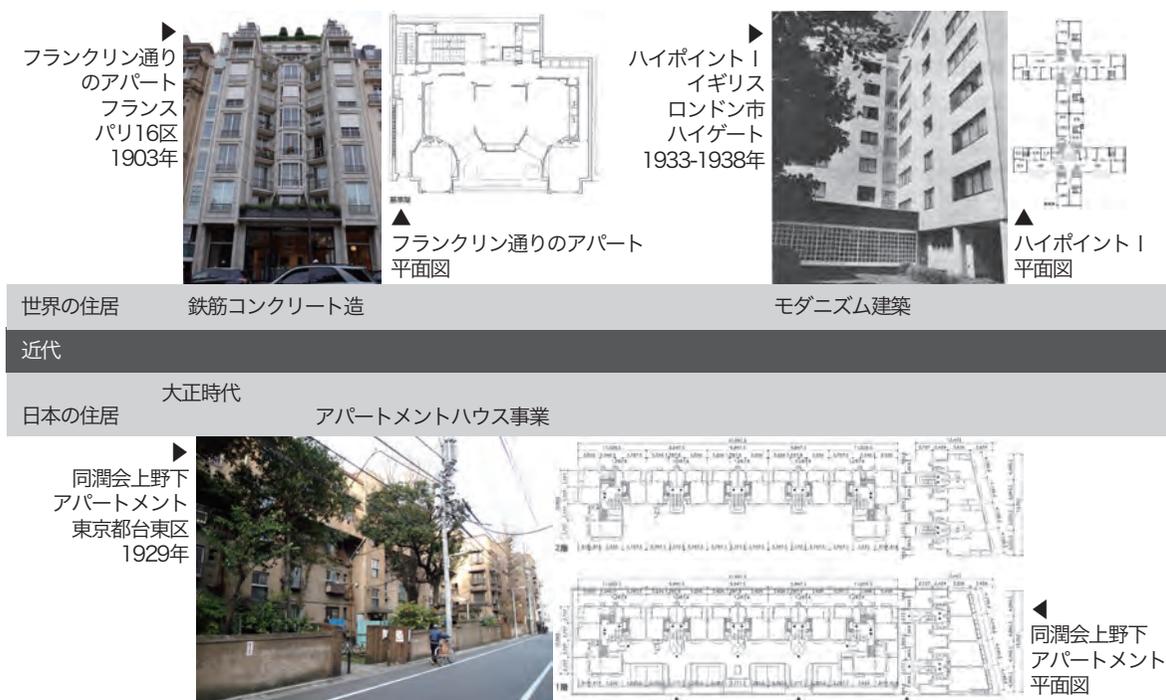


図 2.6 近代の集合住宅ー 2

していった。東京都文京区にあったお茶の水文化アパートメント(図2.5)は、財団法人文化普及会の依頼を受けてアメリカ出身のウィリアム・メレル・ヴォーリス*¹⁰が設計した洋式集合住宅であり、地下1階・地上5階建ての中層住棟にはスパニッシュスタイルの装飾が施されていた。その後、関東大震災(1923年)によって都市の不燃化が喫緊の課題となり、旧内務省が義損金を用いて設立した財団法人同潤会が、鉄筋コンクリート造のアパートメントハウス事業を進めていった。被災者や労働者を収容した公営住宅の先駆けとして、家族や独身者に対して異なる住戸タイプを設定し、集会室・浴室・食事室・洗濯場などの共用施設を組み合わせた賃貸住宅が供給された。東京都台東区と同潤会上野下アパートメント(図2.6)は、地上4階建ての中層住棟で構成され、住棟の装飾や住戸の間取りは和洋折衷に設えられていた。1号館には店舗付き住戸と家族向け住戸、2号館には家族向け住戸と独身者向け住戸が設置され、住棟入口の集会室や屋上階の洗濯場といった共用施設が併設されていた。第二次世界大戦が始まると、同潤会アパートメントハウスは住宅営団へと引き継がれ、戦後は地方自治体に移管されてから分譲住宅として払い下げられる。公営住宅に対して民間住宅の先駆けとなった東京都千代田区の野々宮アパートメントは、フランク・ロイド・ライトの事務所で働いた経験がある土浦亀城が設計した複合型集合住宅であり、モダニズム建築の高層住棟が用いられていた。



図 2.7 現代の集合住宅－1

2.7 現代の集合住宅

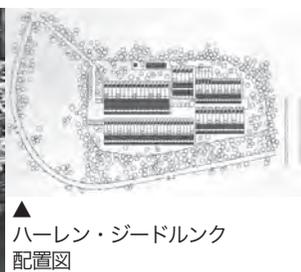
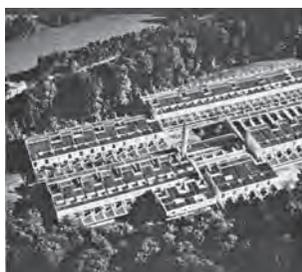
戦後の都市復興や住宅供給への対応が求められたヨーロッパの建築家や都市計画家は、戦前に構想していた計画案を次々と実現させていく。古典様式が重視されたヨーロッパの都市では伝統的な街並みや建造物が再現されると同時に、モダニズム建築から発展した革新的な集合住宅が提案された。オーギュスト・ペレ（ペレ兄弟）の事務所で働いた経験があるル・コルビュジエは、「住居の統一体」や「住居の単位」を意味する**ユニテ・ダビタシオン**（図 2.7）*11 を、フランスの4都市とドイツの1都市で完成させている。近代都市を批判した「**300万人の現代都市**」や『**輝く都市**』などの著書で提案した理想都市構想を実現させた複合型集合住宅であり、ピロティや屋上庭園に加えて日除けの**ブリーズ・ソレイユ**を導入し、**モデュロール**の設計手法や鉄筋コンクリート造の**プレファブ工法**を実践している。マルセイユのユニテ・ダビタシオンでは立体的な街区を想定した地上18階建ての高層住棟を用いて、1人向けから4人向けのメゾネット住戸を交互に積み重ね、3階に店舗や飲食店、7・8階に店舗や郵便局、屋上階に保育園やプールなどの共用施設を併設していた。ヨーロッパからアメリカに亡命した**ミース・ファン・デル・ローエ**は、ドイツで提案した**ガラスのスカイスクレーパー計画案**を応用して、イリノイ州のシカゴにある**レイクショアドライブ・アパートメント**（図 2.7）*12 を設計し、

* 11 （仏）Unité d'Habitation

* 12 （英）Lake Shore Drive Apartments



▶
ハーレン・ジードルング
スイス
ベルン州
1961年
◀
タピオラ・ガーデンシティ
フィンランド
ウーシマー県
1952-1953年
(入居開始)



▲
ハーレン・ジードルング
配置図

世界の集合住宅 ニュータウン

環境共生住宅

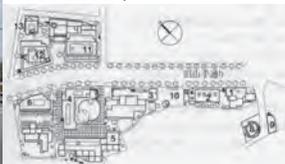
現代

昭和時代
日本の集合住宅 複合型集合住宅

環境共生住宅



◀
代官山ヒルサイドテラス
東京都渋谷区
1969-1998年



▶
NEXT21
大阪府大阪市
1993-1994年

◀
代官山
ヒルサイド
テラス
配置図



図 2.8 現代の集合住宅-2

鉄とガラスのカーテンウォールを用いた鉄骨造で地上 26 階建の高層住宅を実現している。都市型集合住宅が高層化していく一方で、**郊外型集合住宅**を複合化した**ニュータウン**は、職住近接のタウンセンター計画、歩車分離の交通計画、自然調和の環境計画などを取り入れている。フィンランドのエスポーにある**タビオラ・ガーデンシティ** (図 2.8) *13 は住宅財団**アストセーティヨ**が開発したニュータウンであり、ハワードが提案した田園都市構想の影響を受けている。人工池を設けた**タウンセンター**を中心として、緑地帯で囲まれた東西南北の**近隣住区**に低・中・高層住棟を混在させている。**建築家集団アトリエ 5** *14 が設計したスイスの**ハーレン・ジードルンク** (図 2.8) *15 は、湖畔の傾斜地に合わせた段状の低層住棟を用いて、自然緑化と屋上庭園を融合させた**環境共生住宅**を形成している。イギリスでは環境共生型の公営住宅が提案され、**グレーター・ロンドン・カウンシル** (大ロンドン議会) *16 がロンドンのコベントガーデンに建設した**オダムズウォーク** (図 2.9) *17 では、店舗やオフィスを併設した低層階に屋上緑化を施した**立体街区**で構成された**複合型集合住宅**を実現した。オランダのアムステルダムにある**オクラホマ** (WoZoCo, 図 2.9) *18 は、**建築家集団 MVRDV** が設計した「高齢者のための 100 戸の集合住宅」であり、立体的で色彩豊かな外観によって高齢者施設が集まった一街区のランドマークとなっている。

終戦によって住宅営団が解体された日本では、改めて設立された**日本住宅公団**が戦後の住宅供給を主導していった。地方自治体の公営住宅で用

* 13 (英) Topiola Garden City

* 14 (仏) Atelier5

* 15 (独) Halen Siedlung

* 16 (英) GLC :
Greater London Council

* 17 (英) Odhams Walk

* 18 (英) Oklahoma



◀ オダムズウォーク
イギリス
シティ・オブ・
ウェストミンスター
1981年



◀ オクラホマ
オランダ
北ホラント州
1997年

世界の集合住宅

複合型集合住宅

高齢者用集合住宅

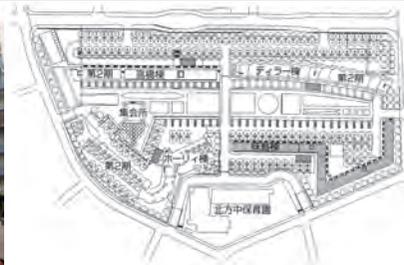
現代

平成時代

日本の集合住宅

公営住宅団地

▶ 岐阜県営住宅
ハイタウン北方
南ブロック
妹島棟
岐阜県北方町
1996-2000年



◀ 岐阜県営住宅
ハイタウン北方
南ブロック
配置図

図 2.9 現代の集合住宅 - 3

いられた標準設計 **51C 型** (p.39 参照) の間取りは、日本住宅公団の住戸プランに応用され、核家族に適した食寝分離・就寝分離・ダイニングキッチンの間取りへと発展していった。高度経済成長期は建築部材の工業化によって住宅の大量供給が可能となり、地方自治体や日本住宅公団が主導して都心の大規模団地や郊外のニュータウン (p.69 参照) が開発されていった。愛知県春日井市の**高蔵寺ニュータウン** (図 2.7) は、公共施設や商業施設が集まったセンター地区を中心として、低・中・高層住棟の集合住宅に加えて一戸建て住宅を混合した 7 つの住区で構成された**ワンセンター方式**を導入している。大阪府の**千里ニュータウン** (図 2.7) や東京都の**多摩ニュータウン**は、小学校区をコミュニティ単位として公共施設や商業施設を備えた近隣住区論を取り入れている。大規模開発によって戦後の住宅不足が解消していく中で、住宅の量から質への転換が始まり、画一的な住環境から個性豊かな集合住宅や住宅団地が展開していった。**槇文彦**が設計した東京都渋谷区の**代官山ヒルサイドテラス** (図 2.8) は、30 年かけて開発した民間住宅団地であるが、店舗やオフィスなどを併設した複合型集合住宅から始まり、ホールやギャラリーなどの文化施設を備えた一街区を形成している。**磯崎新**^{あらか}がコーディネートした福岡県福岡市のネクサスワールドは、オランダ出身の**レム・コールハース***¹⁹ やアメリカ出身の**スティーブン・ホール***²⁰ などが参加しており、店舗や事務所などを併設した中・高層住棟を用いてデザイン性が高い民間住宅団地を形成している。**岐阜県営住宅ハイタウン北方 南ブロック** (図 2.9) では国内外の女性建築家が集まり、生活スタイルの多様化に応じた高層住棟が中庭を囲んだ**公営住宅団地**を設計している。S 4 棟を担当した妹島和世^{せじまかずよ}は伊東豊雄事務所の出身であり、住棟を貫通するテラスや日照を確保する広縁を設けた 33 種類の住戸タイプを用いて、周辺地域と中庭を繋げる集合住宅を提案している。郊外に対して都心における環境共生を考慮した大阪府大阪市の**NEXT21** (図 2.8) は、住戸の可変性や住棟の持続可能性を高めた**スケルトン・インフィル方式**を取り入れた実験型集合住宅となっている。東京都世田谷区の**深沢環境共生住宅**は、住民参加のワークショップを通して環境共生を試みた公営住宅であり、緑豊かな中庭のピオトープや屋上庭園などを用いている。

* 19 (蘭) Rem Koolhaas

* 20 (英) Steven Holl

引用・参考文献

- 2.1) 日本建築学会 編：日本建築史図集 新訂第3版、彰国社、2011年
2.2) 日本建築学会 編：西洋建築史図集 3訂第2版、彰国社、1983年
2.3) 日本建築学会 編：近代建築史図集 新訂第1版、彰国社、1976年
2.4) 日本建築学会 編：第3版 コンパクト建築設計資料集成、丸善、2005年
2.5) 日本建築学会 編：第2版 コンパクト建築設計資料集成 <住居>、丸善、2006年
2.6) 住宅史研究会 編：日本住宅史図集 12版、理工図書、1970年
2.7) 太田静六 著：西洋建築様式史図集 13版、理工図書、1998年
2.8) 後藤久 著：西洋住居史、彰国社、2005年
2.9) 後藤久 監修：精選住居学、実教出版、2016年
2.10) 岸本幸臣 編：図説テキスト住居学 第二版、彰国社、1997年

写真の引用

- 図 2.1 店舗付き集合住宅 平面図：上記 2.8)、p.88 より
図 2.1 ティアナの家 復原模型写真・平面図：上記 2.2)、p.23 より
図 2.2 クリュニーの町家 写真：上記 2.2)、p.50 より
図 2.2 マンバリュ街 写真：上記 2.2)、p.50 より
図 2.3 ベッドフォード・スクエア 平面図・断面図：上記 2.8)、p.186 より
図 2.3 今井町 地図：上記 2.1)、p.101 より
図 2.3 五条の町家 写真：上記 2.1)、p.101 より
図 2.4 パースのテラスハウス 配置図・写真：上記 2.8)、p.190 より
図 2.4 リージェント・ストリート 写真：上記 2.2)、p.81 より
図 2.4 今西家住宅 写真・平面図：上記 2.1)、p.101 より
図 2.4 国森家住宅 写真：上記 2.1)、p.102 より
図 2.5 リーズの労働者用住宅 写真・断面図・俯瞰写真：上記 2.8)、p.192 より
図 2.6 フランクリン通りのアパート 平面図：上記 2.5)、p.49 より
図 2.6 ハイポイント I 写真・平面図：上記 2.5)、p.55 より
図 2.7 ユニテ・ダビタシオン 写真：上記 2.3)、p.59 より
図 2.7 ユニテ・ダビタシオン 断面図：上記 2.5)、p.150 より
図 2.7 レイクションドライブ・アパートメント 写真：上記 2.5)、p.154 より
図 2.8 タビオラ・ガーデンシティ 写真：上記 2.3)、p.62 より
図 2.8 ハーレン・ジードルング 写真：上記 2.3)、p.146 より
図 2.8 ハーレン・ジードルング 配置図：上記 2.4)、p.156 より
図 2.8 代官山ヒルサイドテラス 配置図：上記 2.4)、p.163 より
図 2.9 岐阜県営住宅ハイタウン北方 配置図：上記 2.5)、p.147 より

写真撮影提供・図面作成提供（敬称略）

- 図 2.1 ボンベイ遺跡 写真：夏目欣昇（名古屋工業大学）
図 2.2 グラッドストーンの集合住宅 写真：加藤悠介（金城学院大学）
図 2.3 ベッドフォード・スクエア 写真：加藤悠介（金城学院大学）
図 2.5 お茶の水文化アパートメント 写真・平面図：一粒社ヴォーリス建築事務所
図 2.6 フランクリン通りのアパート 写真：夏目欣昇（名古屋工業大学）
図 2.6 同潤会上野下アパートメント 写真・平面図：北原玲子（カリフォルニア大学バークレー校）
図 2.7 千里ニュータウン 写真：北原玲子（カリフォルニア大学バークレー校）
図 2.7 高蔵寺ニュータウン 写真：北原玲子（カリフォルニア大学バークレー校）
図 2.8 代官山ヒルサイドテラス 写真：横総合計画事務所
図 2.8 NEXT21 写真：小池孝子（東京家政学院大学）
図 2.9 オダムズウォーク 写真：北原玲子（カリフォルニア大学バークレー校）
図 2.9 オクラホマ 写真：夏目欣昇（名古屋工業大学）
図 2.9 岐阜県営住宅ハイタウン北方 写真：北原玲子（カリフォルニア大学バークレー校）

演習課題2 「集合住宅マップをつくろう」

年表と世界地図・日本地図を使って集合住宅マップをつくる。

①年表：時代ごとに集合住宅名・設計者・所在地・建設年・住宅様式・生活様式をまとめる。

②世界地図・日本地図：年表でまとめた集合住宅の所在地をNoで示し、余白を用いてその特徴を図で表現する。



| 時代 | No | 集合住宅名 | 設計者 | 建設年 | 所在地(国・都市) | 住宅様式 | 生活様式 |
|----|----|-------|-----|-----|-----------|------|------|
| | ① | | | | | | |
| | ② | | | | | | |
| | ③ | | | | | | |
| | ④ | | | | | | |
| | ⑤ | | | | | | |
| | ⑥ | | | | | | |
| | ⑦ | | | | | | |
| | ⑧ | | | | | | |
| | ⑨ | | | | | | |
| | ⑩ | | | | | | |
| | ⑪ | | | | | | |
| | ⑫ | | | | | | |
| | ⑬ | | | | | | |
| | ⑭ | | | | | | |
| | ⑮ | | | | | | |
| | ⑯ | | | | | | |
| | ⑰ | | | | | | |
| | ⑱ | | | | | | |
| | ⑲ | | | | | | |
| | ⑳ | | | | | | |